

～教育は熱なり、愛なり、感化なり～

70年ぶりに蘇った胸像： 福井高等工業初代校長 關 盛治

川上 英男

建築学科 S28 年卒業・福井大学名誉教授・前工業会理事長



略 歴

S 5 (1930) 福井市に生まれる
S20 (1945) 福井大空襲、終戦
S23 (1948) 「福井工業専門学校」入学、福井大地震
S24 (1949) 「福井大学」発足、福大へ再入学 (第1回入学式)
S28 (1953) 工学部建築学科 卒業 (第1期卒業)、
文部教官助手に任官
S33 (1958) 文部省内地研究員、東京大学に10ヶ月出張
S46 (1971) 京都大学・論文工学博士
S47 (1972) 福井大学工学部建築科教授
S52 (1977) 文部省在外研究員、米・独に1年間出張
H 6 (1994) 日本建築学会 論文賞受賞
H 8 (1996) 福井大学定年退官、福井工業大学教授
H12 (2000) 福井大学工業会理事長 (～H25)
H21 (2009) 叙勲「瑞宝中授章」受章

(現在) 福井大学名誉教授・福井工業大学名誉教授・日本建築学会名誉会員・日本コンクリート工学会名誉会員・(米) Fifty Years Member of American Concrete Institute

⇒ 編集にあたって

工学部は昨年の2023年12月10日に100周年を迎えた。前日の12月9日に創立記念式典、祝賀会と併せて、記念講演が開催された。講演は100年を振り返るものとし、高等工業学校創立からの創成期を建築史の市川秀和先生、新制大学を含めた全般を大学第1期生であり、また母校建築科の教員として定年まで勤められた川上英男先生による2部構成とした。両先生には大変なお手数をお掛けし、心より感謝申し上げます。殊に満93歳の川上先生には「転んで怪我をしないよう、病気にかからないよう」と、細心の注意を払って日々を送っていただいた。おかげさまで記念講演会は無事、満場の喝采を以って終えることができた。大学1期生とは思えない力強いお声を生で拝聴し、会場は感動の余韻に包まれていた。今回はこの講演や川上先生の記された資料をもとに、100周年記念特集として編集した。

今年7月20日の100周年記念大会でもお二人の先生による講演会が予定されています。ぜひ皆さまにも、ご家族・ご友人お誘い合わせて福井フェニックスプラザの会場へお運びいただき、ライブで生で拝聴いただければと存じます。

末尾ながら、川上先生には昨年7月にかけてがえのない奥様を亡くされたばかりで何かとご心労のところ、ご無理をお願いしました。また講演会にはご令嬢にも付き添い同伴していただきました。衷心より哀悼の誠を捧げますとともに、重ねて厚く感謝申し上げます。

(機械S45卒・事務局 絹谷信博)

胸像再建に到る経緯

- T12 (1923) 9/1 関東大震災
12/10 福井高等工業学校「色染・紡織・機械科」設置交付、關 盛治校長の申し入れにより「建築科」増設
- T13 (1924) 福井高等工業学校 第1回入学式
- S 2 (1927) 福井高等工業学校 校歌制定
- S 7 (1932) 關校長 病気により退任届け出、学生による留任運動
- S 8 (1933) 關校長 逝去、享年56歳
- S 9 (1934) 11/3 卒業生有志により「關校長の胸像」設置
- S19 (1944) 「福井工業専門学校」と改称、「關校長の胸像」戦時供出
- S20 (1945) 福井大空襲、終戦
- S23 (1948) 福井大地震
- S24 (1949) 「福井大学」発足(第1回入学式)
- S26 (1951) 福井工業専門学校 閉校
- S28 (1953) 福井大学 第1回卒業式
- H18 (2006) 「關校長の胸像台座」発見
- H26 (2014) 11/3 「關校長の胸像」再建

胸像台座の発見

今から18年前の平成18(2006)年5月19日、それは川上への一本の電話から始まった。川上は当時76歳、工業会理事長職にあった。電話の主は教え子で建築学科S42年卒業の臼井 武司氏(当時 三越建設工業専務、60歳)、「今、大学キャンパスの整地工事を担当中です。工学部1号館の芦原街道沿いの植え込みに横倒しになって埋まっている石の台座があります。大学施設課から処分するように言われていますが、何だか胸騒ぎがします。いかがいたしましょうか?」との問い合わせであった。「その台座とはいつか伝え聞いたことのある福井高等工業学校初代校長の胸像台座では?」と、川上は一瞬閃いた。「処分しないで、近くに据えておいて下さい。」と頼んだ。

翌日、見に行くと御影石の四角形の台座で高さ110 cm、正面の金属銘板は剥がされていた。しかし、背面を見ると『昭和九年十一月三日卒業生一同』と彫り込まれている。ここで初めて台座は卒業生の

建立であること、大学の備品ではないことが判明したのである。

何という奇遇であろうか! キャンパスの整地工事の担当が建築科OBの会社でなければ、さらには胸騒ぎを感じた臼井OBが恩師の川上に問い合わせなければ、この二人の連携がなければ石の台座は何も分からないまま廃棄されていたであろう。これは当時の卒業生たちの關校長に寄せる熱い敬慕の念が、時を経て土中から今日に蘇ったものに違いない。何という現代の奇跡! 誠に痛快ではあるまいか!

川上はその経歴について県立図書館に通い、県・市の歴史資料や戦時中の新聞記録を調べてみた。太平洋戦争で金属資源が払底していた政府は3回の金属回収令を発し、昭和19年1月には足羽山頂の橋本左内の銅像も対象となった。關校長の胸像供出もこの頃で、石の台座だけが残されたものと推察された。

6月末、まず川上は手製で在り合わせの材料で銘板を作り、『福井高等工業学校初代校長1923～1932關盛治先生胸像台座 福井大学工業会』と墨書きし、針金で台座に取り付けた。

その後、古くなって傷んだ銘板は2回取り替えた。



胸像再建に向けて気運づくり

創建当時の卒業生は600余名、その大半は20歳台前半。その中には兵役に就いた者も多数と思われる。当時の先輩たちの尊い志を何とか復活したいとの想いが、川上に湧いてきた。

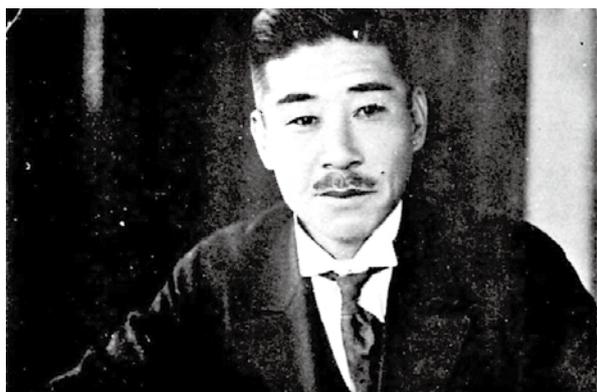
2009年5月、工業会理事会で報告したが、胸像の存在や由来についてご存じの方は一人も居られず、まして再建の話は論外だった。戦災、震災を受けた歳月の重みを、川上は痛感した。

その後の理事会でも再建について発信し続けた。そして、「初代校長の時代の学校はまるで一家族のようであった」と報告したところ、「そんな素晴らしい歴史があるなら、ぜひ工業会誌で紹介して欲しい」との意見が出るに至った。

川上はまず、初代校長 關盛治先生のプロフィールを卒業生に伝えるのが必要と考え、工業会誌に2頁の紹介文を投稿した。「福井高等工業学校初代校長 關盛治先生と胸像台座：2011年 工業会誌62号」

その後の工業会の近畿支部や東海支部の総会で、「その記事をご覧になった方は挙手して下さい」と聞いてみると、2～3割程度に過ぎない。そこで更に2年後にも会誌に投稿をした。「福井高等工業学校創立と建築科：2013年 工業会誌64号」

關盛治校長



關盛治は、明治11年長野県松本市に生まれた。明治36年東京帝国大学機械科卒業後、九州鉄道(株)、豊田式織機(株)、名古屋・米沢・桐生の各高等工業学校教職、またその間に英・独に留学、京都寿製作所専務取締役など、実業界と教育界の双方を行き来した経歴がある。

大正12(1923)年9月、関東大震災が発生した。死者・行方不明者は10万人にも及び、帝都東京の中心部は壊滅状態となった。文部省は大手町の台湾銀行屋上に避難し、仮設事務所を設置して対応していた。

その仮設事務所の一隅には、半年後に開校する福井高等工業学校校長として赴任する關盛治が、開設準備を進めていた。この時、關は45歳。主治医から余命2年の宣告を受けていた。關はこの大災害の中で誕生する学校の運命に、生涯最期の命を懸けた仕事として立ち向かっていた。

福井高等工業は当初、色染科・紡織科・機械科で設立が計画されていた。学校創立委員として関東大震災を経験した關は、「自然災害から国民を守るには建築分野の人材育成と技術向上、地域の建設業の発展が重要である」と考え、文部省に建築科の増設を嘆願し、予算の増額は無いものの許可を得た。そして、「建築科」・「機械科」・色染・紡織を統合した「繊維工業科」の3科でスタートした。学生定員はそれぞれ35・30・35名であった。

この25年後、福井を大地震が襲う。「建築科」は復興に大きく貢献することになる。

教育は熱なり、愛なり、感化なり

福井の地に赴任した關は、松下村塾の吉田松陰・北大のクラーク博士を持って自らを任じ、建築科の新設や落第制度の廃止などユニークな方針を実現した。その教育方針は『事業の第一線に立つ者の養成を目的とし、そのための必須条件として、第1に身体の強健、第2に満々たる覇気、第3に学才を掲げ、この3要素を統一する人格の向上を旨として教育に当たる』とした。



そしてその実践として毎日1～2時間は全学生を校庭に出して体育をやらせた。また学期末には学校の工場で、まとめて10日ほどの実習を集中して実施した。關校長の信条は『教育は熱なり、愛なり、感化なり』であった。そして創立から8ヶ年余り、率先して学生と交わり熱涙をもって諭すその姿勢は、広く感銘を呼びに至った。

続く第2代前田校長は就任挨拶で關校長を評し、「本校は創立以来、關校長を初めとした教職員の方々の熱誠なる指導と学生諸子の純真なる性情により、子弟朋友間は著しく和合し、遂に一家族ともいふべき和氣藹々たる学園を形成したのであります」と述べている。

落第制度の廃止

昭和元(1926)年、3学年の学生が揃った時点で開校式が行われた。その校長式辞で關は、「今日までの青年には青雲の志を懐いて世の中に出ながら、障害に遭遇して当初の意気を喪失する人が少なくない。茲において我々は青年学生の自覚を促し、大局に処するの途を与えねばならない。即ち学生は単に機械的に注入される知識の容器であってはならぬ。然るに卒業証書獲得を唯一の目的と考えている学生が少なくない。彼らは学問の真の精神を忘れ、そのために心委縮し、之より生ずる弊害は数えるに堪えない。私は如何にして学生をこの軌範より脱せしめ、心広く、体裕に3年の学窓を過ごさせんものと思案し、遂に落第制度を廃止することを決意した」と述べている。

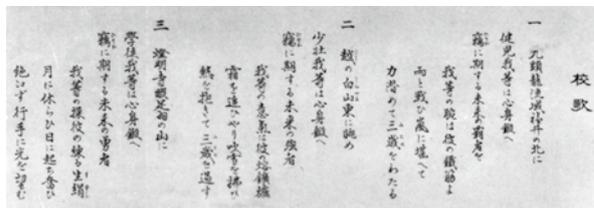
昭和7年建築科卒業の井口 久義(元工業会九州支部長)氏によると、「私は關校長の最後の卒業生。落第はなかったが、学校を1/3以上休んだ者は学校から追放処分になった」とのこと。

しかし、落第制度の廃止で学生の間には伸び伸びとした雰囲気広がったという。

福井高工 校歌

昭和2(1927)年、校歌が発表された(次図)。作詞は高野辰之。作詞家・国文学者、東京音楽学校(現東京芸術大学)教授。文部省尋常小学唱歌「ふるさと」・「春が来た」・「朧月夜」など。作曲は中田 章、東京音楽学校教授。

關校長は、名声高い高野先生を選んで校歌を依頼。歌詞には校長の教育方針が色濃く表現されている。当時、高野先生は50歳前後、中田先生は30歳前後。この校歌はクラスや、学年対抗の各種スポーツ試合の後など、コンパでもよく唄われた。



(校歌)

- 九頭龍流域 福井の北に 健兒我等は心身鍛え 竊(ひそか)に期する未来の覇者を 我等の腕は 彼(か)の鐵筋よ 雨と戦ひ 嵐に堪へて 力磨めて三歳(みとせ)をわたる
- 越(こし)の白山(しらやま) 東(ひがし)に眺め 少壯我等は心身鍛へ 竊(ひそか)に期する 未来の強者 我等の意気は彼(か)の熔鑪(ようこうろ) 霜を追ひやり 吹雪を拂ひ 熱を抱きて三歳を過す
- 燈明寺(なわて) 足羽の山に 学徒我等は心身鍛へ 竊(ひそか)に期する未来の勇者 我等の操(みさを) 彼(か)の鍊る生絹(すずし) 月に休らひ 日に起ち奮ひ 絶えず行手に光(ひかり)を望む

關校長の辞任、留任運動

關校長の突然の辞任について、一部には「現内閣の文教政策に飽き足らぬものがあり、現職にあることを潔しとせず、この挙に出たのではないか」との憶測もあった。しかし、關校長は「辞表の理由は数年来の腎臓病のため、ここ1、2年特に健康が勝れず職務に耐えられないためである。辞意について学生諸君が非常な心配をしてくれて喜んでいる」と、心境を述べた。

一方、学生240余名は拇印をもって留任嘆願書に連判、教授、雇傭人に到るまで同様に連判し、学生総代3名、教授総代2名が上京、これを文部省に持参して留任を陳情した。

留任運動について学生代表は「本校は創立以来特色ある学校で、これは關校長のような特色ある校長

を持っているからであって、我々が福井工高を慕ってきたのもそこにある。その慈愛に満ちた我らの父が忽然として母校を去られることになれば、暗黒に灯火を失う形で前途は暗澹たるものがある。故に子弟の真情として我らの父を慕うのであって、留任運動については穏健にして、少なくとも不穏な動作は絶対にしたくない。余り大げさになっては我らの父に報いる子弟の真情が水泡に帰すことになるから、皆も自重し、留任運動を進めるにしても日課の実習は忠実に実行している」と、その意図を述べた。

文部省でも学生総代と教授総代が連判の嘆願書を持参、極力留任方を陳情したことに感じ、文部次官が關校長の辞意を思いとどまらせるよう一肌脱ぐことになった。しかし、昭和7年5月14日付、依願免本官の辞令が出され、關校長は退任した。

そして翌年、昭和8年11月22日逝去。享年56歳。

胸像の設置とその後

關校長の退任、逝去を知った学生や卒業生の敬慕の念は、せめて胸像へと向かったものであろう。この時の卒業生は587名、選科修了生30名。これら全国に散らばった卒業生一同の願いが形になったのは、校長退任から2年半。昭和9年11月3日(当時の明治節、現在の文化の日)胸像は正面入り口近くに設置された。



その後の昭和16年、戦争で金属資源が払底していた政府は金属回収令を発した。最初は塀、門柱、手すり、看板などが指定され、戦局が悪化し始める昭和17年後半には梵鐘、18年には仏具、19年1月には足羽山頂の橋本左内の銅像も対象とされ、貴金属のほとんど全てが強制的回収の対象となった。關校長の胸像もこの時に供出されたと推測される。とすると、9年2ヶ月は健在であったことになる。

その後、母校のキャンパスは昭和20年の空襲、23年の大地震、そして水害と、度重なる災害を蒙った。そして姿を消してから台座が発見されるまでの62年間、胸像は忘れ去られた。

『工業教育一家言』

やがて胸像再建の機運が盛り上がり、理事会でも90周年記念事業として採択された。

その間2013年6月頃、工業会絹谷事務局長がネットで「關盛治」を検索、『工業教育一家言 關盛治 述』と、『水力機械学 關盛治 著』を発見した。しかし、これらの図書は度重なる災害を被った本学図書館には見当たらなかったが、担当の網本図書館員が国立国会図書館の『近代デジタルライブラリー』（電子媒体）の中に見つけ出してくれた。翌2014年、復刻版として世に送り出した。

關校長は折々の講演に臨んで、準備した原稿230枚を仮綴じして学校に残してあった。本人逝去後にこれらを編集して、昭和9年創立10周年の記念として福井高工が発行したのが『工業教育一家言』である。内容は式辞など7編、随想22編。



第2代前田校長の序文の要旨を抜き書きすると、『前校長 關 盛治君は本校の創立者であり、同時に本校今日の基礎をつくられた人である。君の偉大な

業績は我々学園の指導精神として今なお炬火の様に我々の頭上に輝き、君の理想は我々の理想としていささかも変わることはない。

君の在任中の講演原稿は、一読したところ君の面目躍如として紙面にあふれ、再読熟読するに及んではその熱誠が人を動かさずにはおかない君の真価に、おのずから襟を正さざるを得ない。しかも全編を通じて読むときは本校10ヶ年の活気ある歴史は脈々として拍動し、回顧録としても絶好の文献である。各位の参考に供する所以である。』と、記されている。

また『水力機械学』は、博文館が我が国の将来は工業の発展によるとの観点から発行した工業叢書(全36巻)の一巻である。奥付けには、工業全般にわたるテーマについて「当今知名の専門学者に執筆を依頼した」とある。本文は301頁、当時の英国の権威4人の著書を参考に、水力を応用した機械についてまとめたもので、体裁は縦書き、単位はフート・ポンドである。

これによれば、当時の關先生は帝大卒業2年にして、「当今知名の専門学者の一人」として認められていたことが分かる。

胸像の再建

高嶋猛先生を中心に再建委員会を立ち上げ、「当初の台座を現状のまま保存すること、再建の説明板を別に設けること」などを基本として実施設計となった。

胸像の製作にあたっては、銅製品の日本最大の産地である高岡銅器とすることとし、川上、高嶋、絹谷の3名で高岡市内を回り、(株)ナガエに依頼することとした。鋳型を造るにあたり、彫刻家の喜多敏勝先生より關校長の写真を求められ、探し回った。しかし、空襲、地震、水害により壊滅的被害を蒙ったため、見つからなかった。

やむなく事情を話し、吉田宏彦先生(建築科教授、福井建築界のシンボリック的存在)が關校長を描いたスケッチ画と、『工業教育一家言 關盛治 述』の本を渡し、イメージして作成してもらうこととした。

そして、2014年5～9月、会員に募金を呼びかけ、約300人から300万円以上が集まった。

こうして作られた新たな青銅製の胸像は、高さ

69cm、台座を含めた全高は189cm。その隣には、關校長の教育信条などを記した説明板が設置された。(下図)

台座掘り出しから8年、正門を入った右手側、工学部1号館の前に胸像は再建された。すぐそばにはキャンパスで100年間、唯一不動のくすの木が見守ってくれている。



2014年11月3日、工学部創立90周年記念事業「福井高等工業学校初代校長 關盛治先生の胸像再建」の記念式典が開催された。除幕式には同窓生ら約60人が出席。あいにくの雨天のため、アカデミーホールの屋内にて催された。

参加者が帰宅する頃には薄日も射す中、正門で「關先生の胸像」が見送られていた。

結びに

川上は、大学の第1期生として、また母校の教員として100年を振り返り、次のように締めくくる。「『教育は熱なり、愛なり、感化なり』の信条のもと、初代校長 關先生の作り上げられた素晴らしい教育環境、その後工学部の辿ってきた歴史、特に戦災、地震の困難を乗り越えてきたその生きざまに、改めて敬意と感謝をささげます。

卒業生にとって母校は、青春時代の故郷である。これからも永遠の故郷として、ますますの飛躍を願うばかりです。校歌の結びにある『絶えず行く手に光を望む』、これを応援の言葉としましょう!!」